

『色鮮やかに衣替えを』

大石 泰司

2
0
2
4
/
0
6
/
0
2

第 2 稿

ペ
ラ
5
4
枚

登場人物

後藤俊（24）・・・クリーニング屋で働く

青年。

後藤実子（59）・・・俊の母。病後でリハ

ビリ中。

成瀬朱莉（24）・・・俊の幼馴染

丸山涼（19）・・・俊の後輩。アルバイト。

上司（55）・・・俊の仕事先の上司

幸代（44）・・・クリーニング屋の店員。

あらすじ

京都の町で、クリーニング工場の配送ドライバーとして働く後藤俊は、美大を卒業したあと、病み上がりで退院したばかりの母と暮らしていた。

必要以上に上は目指さず、ただ「いつもの日常」を生き続けていたある日、幼馴染だが疎遠になっていた成瀬朱莉と再会する。朱莉は、デザインの仕事を手伝ってほしいと頼むが、俊は断ってしまう。

そのことを母に相談しようとしたその日、母は自宅で首つり自殺を図っていた。母がどうして自殺をしたのか、これからどう生きてらいいのか、わからなくなってしまう俊。しかし、母が自分のせいで俊の生き方を狭めていることに罪悪感を感じていることを知り、俊はもう一度自分の本当にしたいたいことと向き合うようになる。

○ 京都・田舎街の実景（夏・朝）

○ 後藤家・キッチン（朝）

目覚ましのアラーム音が2階の方からこもった音で聞こえてくる。

やがて止まり、しばらくして起きてく

る後藤俊（24）。

俊、まっすぐ冷蔵庫に向かい牛乳を取り出し一気に飲み干す。

はあと一息つく俊。

俊 「……」

隣の家から少し低めの犬の鳴き声が聞こえる。セミがしきりに鳴いている。

○ 同・洗面所（朝）

歯磨きをしている俊。

上階からどたどたと音が聞こえてくる。

俊、何かに気が付き急いで口をゆすぐ。

○ 同・寝室（朝）

無理な体制で必死にベッドから起きよ
うとしている後藤実子（59）。

ドアを開けてやってくる俊、すぐに実
子に駆け寄り

俊 「母さん、いいよいいよ、やるから」

と、実子を支え、体を起こす。

実子 「ごめんなあ」

車いすを寄せに行く俊。

俊 「無理したらあかんよ、呼んでくれてえ
えからな」

実子 「……うん」

俯き顔の実子。

○ 同・表（朝）

大型の車が家の前に留まっている。

俊、スタッフとともに、実子を車いす
ごと車の中に搬入する。

実子 「俊、頑張っつね」

俊 「うん。母さんも」

にこりと笑う実子。

○ 並木道（朝）

緑一色の並木道を歩いている俊。

○ コンビニ・表（朝）

缶コーヒーを買って出てくる俊。

コンビニの傍らで遊んでいる子供たち。

俊、子供たちの無邪気さに思わず笑みがこぼれる。

○ クリーニング工場・車庫

配送用の車が並ぶ車庫。

青い服を着た配送員がせわしなく動いている。

俊、ハイエースに服が入った籠を乗せ、ドアを閉め運転席に乗り込み、エンジンがかかる。

助手席のバインダーを手に取り、確認した後、発車する。

○ 車内

運転している俊の横顔に朝の光がちらつく。

○ スーパー・駐車場

駐車する俊。

○ 同・クリーニング店・表

洋服たちを担いで店に向かう俊。

○ 同・店内く表

カウンターの裏でワイシャツのタグ付けをしている幸代（４４）。

俊、軽く挨拶をして入っていき、洋服を裏に掛けていく。

俊 「これでいいですか？」

と、片隅にまとめてある袋を指さす。

幸代、作業しながら

幸代 「うん。あ、これも」

と、奥にある袋を引っ張ってくる。

袋を持って軽く会釈して出ていく俊、
そのままハイエースに向かって歩いて
いく。

声 「俊？」

俊、振り返ると、そこには成瀬朱莉（
24）がぼんやり立っている。

○ 同・駐車場

ハイエースにもたれながらコーヒーを
飲む俊と朱莉。

朱莉 「いつ帰ったんよ」

俊 「えーっと、1年前くらいかな」

朱莉 「もう、なんで言わへんかったん」

俊 「悪い、忘れてた」

朱莉 「（笑って）忘れてたってお前なー」

俊 「ははは」

朱莉 「やっぱり、お母さんよくないん？」

俊 「いや、全然元気よ。リハビリもだんだ
ん数少なくなってるし」

朱莉 「そっか、でもほんまに大変やったな」

俊 「まあ、うん」

朱莉 「俊は今何してんの」

俊 「ん？ ああ、クリーニング（車を見て）
」

朱莉 「そうやなくてさ、その、絵の方」

俊 「ああ、うん。……描いてないな、最近」

俊、顔をそらす。

朱莉 「なんで。やめたん？」

俊 「うん」

そらした俊の顔を見つめる朱莉。

朱莉 「そっか」

俊 「朱莉は？ 何してんの」

朱莉 「今は区の観光課ってとこで働いてる」

俊 「うげ、公務員かよ」

朱莉 「（笑って）わるいかー？」

俊 「（笑っている）」

俊の横顔を見つめている朱莉。

俊、笑ってはいるがどこか寂しそう。

朱莉 「……あ、そうや。あんな、今度駅前
やるイベントがあんねんけど、今回私

がそののポスターデザイン作らなあか
んくて」

俊「ふうん」

朱莉「俊、やってくれへん？」

俊「いや、俺無理よ（笑って）」

朱莉「あたし苦手やねんあーゆーの」

俊「いやいや、俺もうやめたし」

少しの間。

朱莉「……そっか。まあそうやんな。ごめん」

俊「あ、いや、こっちこそごめん」

朱莉「まあ、また気が変わったら言っとな」

俊「うん」

また、間。

朱莉「あのさ、本当にごめんね。あの時」

俊「もういいよ（笑って）。何年前の話だ

よ」

朱莉、無理に笑って見せ

朱莉「……そっか。よかった。じゃあ、また

ね」

俊「うん」

朱莉、控えめに手を振って去っていく。
俊、朱莉の手の薬指に指輪がはめられて
いることに気づく。

○ 走っているハイエース（夕）
静かに運転している俊。

○ クリーニング工場・表（夜）
出てくる俊。

○ 橋の上（夜）
スーパーの袋を持って歩いている俊。
橋は暗く、川の景色はほとんど見えな
いが、うっすらと遠くに山々の形が浮
かんでいる。
山々には目もくれずまっすぐ歩く俊。

○ 後藤家・ダイニングキッチン（朝）
椅子に座ってテレビを見ている実子。
傍ら、洗い物をしている俊。

俊 「今日な、朱莉にあったわ」

実子 「朱莉ちゃん元気やった？」

俊 「うん。普通な顔して結婚指輪つけてた」

実子 「ああ、そうや、あの子結婚したんよ」

俊 「しらなかったよ」

実子 「でも、結婚式とかしてないんちゃうかな」

俊 「心配してたよ。母さんのこと」

実子 「えーほんまに？ やっぱ優しいなあ」と、嬉しそうな声色。

俊、振り返って実子の後ろ姿を見つめる。

椅子に座ったまま動けないでいる実子の背中。リモコンをとろうとする手が震えている。

俊 「……（何かを言い淀んでいる）」

○ 同・俊の自室

布団に座り、携帯をいじっている俊。
窓から見える荘厳に佇む京都の山々。

ふと、壁に貼られている小学生の頃の
スケッチに目をやる。
見守るように佇む山々。

(F・O)

○ 美大・教室（回想・夕）

20人ほどがキャンバスに向かって筆
を走らせている。

真ん中の方にいる俊（21）、筆を持
ったまま俯いて動かない。

キャンバスは真っ白なまま。

歩いて後ろから見回ってくる教授（5
5）。

教授「おい、描かねえなら帰っていいぞ」

と捨て台詞を吐いて歩いていく。

○ 並木道（朝）

歩いている俊。

○ クリーニング工場・車庫

ハイエースに籠を詰め込む俊。

おい！ と呼び止められ、上司（42）
が、丸山涼（19）を連れて駆け寄っ
てくる。

上司「こいつ、今日からなんやけど、連れて
ったってや」

俊、丸山を一瞥する。

丸山は、いかにも若者というような派
手な髪にピアス。俊と目を合わせよう
としない。

○ 車内

運転する俊と、助手席に座る丸山。

異様に静かな空気にそわそわしている

丸山。

丸山「あの、なんか、話しません？」

俊「いいよ」

×

×

×

丸山 「で、そいつそのまま川に飛び込んでっ
て！ そのあとびっしよびしよですよ。
マジで笑いましたあれ！」

俊 「……」

丸山 「ってあれ、後藤さん、聞いてます？」

俊 「よくしゃべるな」

丸山 「（笑って）どうも」

俊 「君、まだ若いだろ。なんでこんな仕事
選んだんだ」

丸山 「え、聞いちゃいます？」

俊 「いや、やっぱいい」

丸山 「俺、映画とりたいんすよ！」

俊 「……（呆れている）」

丸山 「結構自給いっすよねこのバイト。運
転するだけで楽勝だし」

俊 「……」

丸山 「後藤さん映画とか見ます？ 映画って
本当に人に元気あげられるじゃないっ
すか。俺そういうのマジでいいと思う
んすよね」

赤信号で止まるハイエース。

俊 「……あのさ、君が考えてるほど簡単じゃないと思うけど」

丸山 「そんなの分かってますよ。でもなんも成し遂げない人生なんて嫌なんで。俺」
俊、一点を見つめている。

○ リハビリステーション

広い空間でリハビリに取り組む患者とスタッフたち。

その中に険しい顔で歩行訓練を行う実子の姿。

○ 同・休憩スペース

廊下に設けられたテーブルとイス。
そこに座る朱莉。かしまっている。
遠くからスタッフとともに来る実子。
朱莉、立ち上がって

朱莉 「お久しぶりです」

実子 「ごめんね、突然呼び出しちゃって」

○ クリーニング店・店内

クレーマー「落ちてへんって言うてるやろ！」

クレーマーのおばさん（40）が幸代に文句をつけている。

その傍らで作業する俊と丸山。

丸山、ちらちらと気になる様子。

○ 同・表

出てくる俊と丸山。

丸山「ああいうの、よくあるんすか？」

俊「うん」

丸山「なんかガツンと言ってやりたいつすね、

あーゆーのを見ると」

○ 車内／道路

窓の外をぼんやりと眺めている丸山と、
運転中の俊。

と、丸山が何かを見つける。

丸山「ちよ、止まって、止まってください！」

俊 「駄目だ」

止まらない車。

丸山、急に車のドアを開け、飛び出す。

激しく転がっていく丸山。

すかさずブレーキを踏み、止まるハイ

エース。

丸山、逆方向へ走っていく。

俊、舌打ちして車から出る。

遠くの方で、倒れている老婆に必死に

話しかけている丸山。

それを見ている俊。

俊の目線。老婆の姿が実子に変わる。

頭から血を流す実子。

○ 車内（夕）

腕を抑えているところが痣になっている

る丸山、窓を見て黙っている。

丸山 「……」

俊 「俺さ、ちょっと前まで絵描いてたんだ」

丸山 「……」

俊 「美大にいったんだけど周りの奴ら、え
ぐいやつばっかでき」

丸山 「……」

俊 「俺も、君みたいに真っすぐ生きられた
らよかったのにな」

丸山 「……俺、後藤さんみたいにはなりたく
ないっす」

と、ぼそつと言う。

俊 「そうか」

○ クリーニング工場・表（夜）

出てくる俊と丸山。

挨拶もなしに帰っていく丸山。

○ 橋の上（夜）

歩いていく俊。

街灯が俊を照らす。

○ 後藤家・リビング（夜）

俊 「ただいまー」

と言って入ってくる俊。

真っ暗な室内。閑散としている。

俊、奥へ進み、リビングの電気をつける。

俊 「母さん？」

と、キッチンの方へ行く俊。

実子の姿はない。

俊 「母さん！」

返事はない。あせる俊、息が荒い。

ドタンつと音が聞こえたのは寝室の方からだった。

恐る恐る覗く俊。

そこには、泣いて嗚咽しながらうつ伏せに倒れている実子。

寝室の暗闇の中にリビングの明かりが差し込み、うつすらと天井にかかった首吊り縄が見える。

呼吸が激しくなってくる俊。

実子はうう……と泣いている。

○ 病院・病室

セミがしきりに鳴いている。
ベッドに横になる実子、窓の外を見て
いる。

俊、そばに座り黙っている。
実子の表情はよく見えない。

俊 「ちよつと外の空気吸ってくる」
返事はない。
立ち上がり、出ていく俊。

○ 同・廊下

まっすぐ出口に向かう俊。
と、前から焦った表情の朱莉が歩いて
くる。
目が合う二人。

○ 病院近くの公園

ベンチに腰かけている俊と朱莉。
朱莉 「お母さんと話した？」
俊、俯きながら首を横に振る。

俊 「わかんない」

朱莉 「え？」

俊 「わかんないよ。なんで母さんがあんなことしたのか」

朱莉 「……私な、昨日俊のお母さんと少しだけ話したんよ」

俊 「……」

○ リハビリステーション・休憩所（回想）

向かい合って座る朱莉と実子。

朱莉 「あの……以前俊には、本当にご迷惑をおかけしてしまっ……」

実子 「ええのええの。そんなん。朱莉ちゃんのおかげで入賞できたんやし」

朱莉 「で、でも……」

実子 「それよりな、今の俊の方がまずいんよ」

朱莉 「え？」

実子 「ほら、あの子絵描くのやめたやろ。あれ、たぶん私のせいやねん」

実子、震えながら腕を上げている。

実子「私がこんなんやから、俊に心配ばかりかけてもうてな……」

朱莉「……」

実子「俊にはもつとのびのび生きてほしいねん。やから早くリハビリ終わらせなあかんねんけど……」

朱莉「俊は、大学までは続けてたんですか？」

実子「うん。私にはなんも言わんけど、うまくいかなかったみたいやね。でも、それで絵を描くのが嫌いになるような子やないと思うねん。きっと私のせいで俊が好きなことできてへんって思うと、ほんまに辛くて……」

朱莉「あたしの方からちよっと聞いてみます」

実子「うん……。ごめんね、こんなこと頼んでしまっ」

朱莉「大丈夫ですよ」

と笑って見せる。

実子「ふう、よかった。朱莉ちゃんみたいな子がおって、ほんまに良かった」

と、立ち上がるろうとする。

慌ててスタッフが車いすを寄せるが、首を振って拒否する実子。

朱莉も心配そうに立ち上がる。

実子、よたよたときこちない動きで歩き出す。

実子「またね、朱莉ちゃん」

と、転びそうになるが、スタッフが支えている。

呼吸を荒くしてつらそうな表情の実子。その様子を心配そうに見守る朱莉。

○ 元の公園

俊 「なんやねんそれ……」

朱莉 「お母さんは俊のことを心配して」

俊 「違うやろ。俺はこの1年間ずっと母さんのこと支えてきて、自分の時間だつて犠牲にしてきて。その結果がこれかよ！」

朱莉 「自分を犠牲にとってほんまに言うてるん
？ あんたはお母さんを言い訳にして
逃げてるだけやんか。ちよつとした挫
折くらいで傷心しちゃってさ」

俊 「……なんも知らんくせに。そもそもお
前が勝手にコンクールに出したりしな
ければこんなことにはならんかったん
や」

朱莉 「それは……」

俊 「才能もないのに無駄に期待されるプレ
ッシャーがお前にわかるかよ」

朱莉 「じゃ、このまま逃げてるつもり？」
面食らった表情の俊、俯き始める。

俊 「ほんなら、どうしたらええねん」

朱莉 「怖いんやろ、変わるんが」

俊 「……」

朱莉 「お母さんが、俊にどうしてほしいのか。
俊自身がほんまはどうしたいんか。考
えてみたら？」

俊 「俺は……」

俊、顔を上げ、何かに気が付いた表情。
朱莉に何かを伝える俊。カメラは遠く
て声が聞こえない。

○ 病院の実景（夕）

日が落ち、山吹色に照らされた病院。

○ 同・病室（夕）

変わらず窓の外を見つめる実子。
静かに入ってくる俊。

夕日が差し込んでまぶしい病室内。

俊 「きれいだね」

実子 「……」

俊 「ちよっと、昔のこと思い出してさ、家
の壁一面に油性ペンで落書きしちゃっ
たときのこと、覚えてる？」

実子 「……」

俊 「何を描いたのか忘れたけど、母さんは
怒りもせず、騒ぎもせず、静かに俺の
絵を褒めてくれたんだよ」

実子「……」

俊 「母さん、俺さ、もう一回やってみても

いいかな……」

と、涙があふれてくる。

実子、ゆっくりと振り返る。

涙でぐしょぐしょになった実子の顔。

夕日に涙が反射して光っている。

○ 京都・田舎街の実景（秋・朝）

○ 後藤家・表（朝）

実子の乗った車いすを押して出てくる

俊。

俊、車に実子を搬入する。

○ 並木道（朝）

ゆっくりと少し色づいたイチヨウを眺

める俊。

○ コンビニ・表（朝）

缶コーヒーを買って出てくる俊。
子供たちはランドセルを背負って走っ
て登校していく。
笑って見ている俊。

○ クリーニング工場・車庫

籠をハイエースに積んでいく俊。

上司「もう、いいのか？」

俊、振り向いて

俊「ええ」

上司「そうか。無理すんなよ」

俊「はい」

と言って、乗り込んでいく。

窓ガラスをトントんと叩く音がして、

丸山が顔をのぞかせる。

俊、窓を開ける。

丸山「後藤さん、大丈夫すか？」

俊「大丈夫。ありがとう」

丸山「よかったっす」

俊「仕事、覚えたか？」

丸山 「バツチリすよ」

と、去っていく。

俊 「丸山！」

振り返る丸山。

俊 「頑張れよ」

丸山 「(少しだけ笑う)」

微笑む俊。

○ 車内

運転している俊。朝陽がちらつく。

○ クリーニング工場・表(夕)

出てくる俊。

○ 橋の上(夕)

秋になり、まだ日が落ちずにいる。

夜の風景と違い、遠くに見える山々は

はつきりと写り、流れる水面に太陽が

反射している。

橋をわたっている俊、立ち止まり、橋からの景色を眺める。

荘厳な山々に包まれる俊。

俊、カバンからスケッチブックを取り出し、デッサンを始める。

了